

Title	中世後期英文学における友情の二面的伝統：賞讃される美德と偽りの友人像
Sub Title	The dual tradition of friendship in late medieval English literature: the praise of virtue and the imagery of false friends
Author	小川, 真理(Ogawa, Mari)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.94, (2008. 6) ,p.350(17)- 366(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎没後25周年記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00940001-0366">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00940001-0366</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 中世後期英文学における 友情の二面的伝統

—賞讃される美德と偽りの友人像\*

小川 真理

古代から友情は、文学作品のモチーフとして、あるいは哲学者らの議論の対象として取り上げられ、有益な美德として賞讃されてきた。その伝統は中世、ルネサンスの時代にまで受け継がれ、多くの作品において友情が重要な役割を果たすと同時に、古典期の議論を踏まえてキリスト教世界においても友情論が生み出された。本稿では、こうした友情賞讃の流れを追いながら、一方では必ずしも称揚されない〈友人〉の姿が描写されていたことに注目する。こうした否定的な描写はこれまで注目されてこなかったが、実際には友情に関してより多様な視点から著述が為されていた興味深い事実を提示している。

古代ギリシアにおいて哲学者や賢人たちは、友情の効用や素晴らしさを論じた。3世紀頃に活躍したディオゲネス・ラエルティオスが『ギリシア哲学者列伝』に纏めたところによれば、多くの哲人が友情関係を定義し推奨している。アンティステネスは優れた人こそ友であるとし、友人とはもう一人の自己であるとキプロスのゼノンが、一つの魂が二つの身体にあることだとアリストテレスが定義した。ストア派は善き人の中にのみ友情は成立するとした。物を共有し、平等な関係を築き、進んで助け合うことも多くの者が主張している。特にアリストテレスは『ニコマコス倫理学』において友情論を展開し、幸福のために第二の自己で

ある善き友が必要であること、多数の友は持てないこと、順境逆境双方において友が求められることを論じている。アリストテレスの論はキケロに多大な影響を及ぼしたのみならず、中世期における論考の下地ともなった。古典期の議論では、男女の徳は同等であるとした犬儒学派の祖先アンティステネスは例外であり、一般的に友情は善良な男性のみが持ちうるものとされる。<sup>1</sup>

ギリシア神話やラテン文学においては、男性の登場人物二人の間柄が描かれた。ギリシア神話におけるテーセウスとペイリトオス、テューデウスとポリュネイケース、ウェルギリウスの『アイネーイス』のニーソスとエウリュアロスなどが例として挙げられる。さらに、キケロの『友情について』（紀元前44年）は、後世に至るまで広く読まれた重要な友情論である。ラエリウスが娘婿たちファンニウスとスカエウォラに友情の諸問題を論ずる本書では、友情は二人か数人の間でしか結ばれず、不変の本性から生ずるものであるがゆえに友情も変わらず続くという定義が為される。さらに、友人のためならば何であれやるべきか、という問いにラエリウスは、そもそも友人には立派なことを頼むべきだが、生存権や名声が懸かる場合には多少道から逸れても援助すべきという答えを示した。また、愛してしまってから後悔しないように最初に判断せよ、と繰り返し戒められている。本作における友情は、「これほど自然に適うもの、順境にも逆境にもこれほど役に立つものはない」<sup>2</sup>のものである。キケロは、男性の間にしか友情は育まれ得ないとは言明していないが、ローマの実力者の例を引き合いに出している以上、男性の挿話のみが言及される。

ギリシア・ローマの古典だけでなく、聖書にも重要な友情譚が見出される。「箴言」17章17節「どのようなときにも、友を愛すれば／苦難のときの兄弟が生まれる。」、「集会の書」<sup>3</sup>6章15節「誠実な友は、何ものにも代え難く、／そのすばらしい値打ちは計り難い。」などの格言的な文言、および「ヨハネによる福音書」15章15節のイエスの言葉「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知ら

ないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。」に加え、<sup>4</sup>「サムエル記上」18章から23章にダビデとヨナタンの挿話がある。この物語は友情の主題の最も重要な例とされることもあり、<sup>5</sup>ヨナタンが父サウルからダビデを守り、かばう様子が描かれている。また、二人の魂が結びつき、互いに重ねて契約を結び、神の前に誓いをたてる様子が語られる。

古典期以来の友情論は中世にも受容された。キケロの『友情について』は長く読まれ、500程度の写本が現存し、自国語への翻訳も行われた。さらに、本作をキリスト教世界の修道院において受容した著作として、12世紀に活躍したシトー会修道士リーヴォーの聖アエルレッドによる *De spirituali amicitia* (1160年頃) がある。本書では、序文に『友情について』と出会った思い出が語られるが、本文でも聖書や教父の著作に加えて頻繁にキケロが援用され、『友情について』から学んだことを聖書の権威によって裏づけることをねらいとして執筆がなされた。第一部「友情とは何か」、第二部「友情の利点」、第三部「完全な友情の必要条件」の三部構成の本作は、第一部ではアエルレッドと友人アイヴォ、第二部ではアエルレッドと二人の修道僧ウォルターとグレイシャンとの対話形式を取り、その点でもキケロとの類似が認められる。

*De spirituali amicitia* においては、キケロと同じように友情は何にも勝るものとして称讃され、徳高き人間同士の間にもみ真の友情が続くと主張されている。アエルレッドは悪徳に基づいた合意のもとに育まれる友情、実益を推し量ったうえで結ばれる友情を糾弾し、神への愛、神に対する知識へと導かれる精神的な友情を賛美した。

Dicatur itaque amicitia alia carnalis, alia mundialis, alia spiritalis. Et carnalem quidem creat uitiorum consensus; mundialem spes quaestus accendit; spiritaalem inter bonos uitae morum studiorumque similitudo conglutinat.<sup>6</sup>

このようにアエルレッドは肉体の、世俗の、精神の友情を分類し、精

神の友情以外は単に感情の類似から友情と呼ばれてしまうだけの、真でないものとして批判している。アエルレッドの論は、キケロを引用していることもあり多くの点で『友情について』と類似するが、両者の間で大きく異なる点は、キリスト教の文脈のもとに論じられるがゆえに、神の權威に命じられた自己犠牲を友人のために行うことが友情の目的とされる点である。

Patet proinde ex his omnibus certa et uera spiritualis amicitiae meta: nihil scilicet negandum amico, nihil pro amico non sustinendum, quod minus sit quam ipsa pretiosa corporis uita, quam ponendam pro amico diuina sanxit auctoritas. Quocirca cum uita animae corporis sit multo praestantior, hoc omnino negandum censemus amico, quod mortem inferat animae, quod nihil aliud est quam peccatum, quod Deum separat ab anima, animam a uita.<sup>7</sup>

Spiritual friendship の目標を明確にしたこの箇所は、友のためなら何であれ行うべきか、というキケロも論じた問いに対する解答も含んでいる。アエルレッドはキケロ同様、友のためとはいえ卑劣な行為を行うことを戒めつつ、魂の死を招くような事態だけは避けなければならないと警告している。キケロが友人のためでも行ってはならないこととして国家反逆を挙げ「他の罪の場合でも言い訳はみっともないし受け入れがたいが、とりわけ、友人のために反国家的なことを行った、と申し立てる時はそうであるからな。」<sup>8</sup>と述べたのとは対照的である。

こうしてキケロの友情論が直接、あるいはアエルレッドの著作を通して文学作品に影響を及ぼしたかどうかについては多様な見解がある。<sup>9</sup>しかし、修道院から生み出された作品も世俗の文学に影響した可能性が指摘されており、<sup>10</sup>実際に物語における描写はキケロらの論と十分類似関係が指摘できる。例えば、二人の男性が友情の下に互いに助け合うさまは多くの物語の主題となった。例として、ヨーロッパ各国で翻案さ

れ13世紀に中英語版の成立した *Amis and Amiloun* や、同じく各国語版が作られ14世紀に中英語に翻案された *Guy of Warwick* がある。キケロが「われわれが友情の中に求める不動の物堅さの基盤は、信義である」<sup>11</sup>と述べた通り、この二作品は友情の誓いの場面を含む。また *Amis and Amiloun* は、各国語のバージョンに共通して主人公は友人のために決闘裁判を身代わりし、不治の病に侵された友を癒すために罪なきわが子を犠牲とし、常に友情が最優先される。*Guy of Warwick* も主人公 Guy と Tyrry が友情の誓いの下、Guy が Tyrry を追放した悪意ある臣下と闘うなど、互いを援助していく。一方最古の中英語ロマンスとされる *King Horn* (1200年頃) では誓いの場面こそないが、主人公の王子 Horn を常に友人 Athulf が支えている。Athulf はいつでも Horn に忠実で、王子の留守を守り、王子の愛する女性を見守る。Horn は Athulf に王女を娶わせることでそれまでの助力に報いている。

チョーサーの作品でも、『カンタベリー物語』の「騎士の物語」でパラモンはアルシーテのいところで、かつ ‘thy brother | Ysworn’ (1131-32)<sup>12</sup> であると述べ、どんな場合でも助け合うことを誓ったと主張している。『トロイルスとクリセイデ』も、主人公トロイルスを助け奔走するパンダルスの行動を友のための献身的行為と位置づけ、恋に悩むトロイルスの非常な苦痛を字義通りに解釈するのであれば、トロイルスとパンダルスの関係を古典期の友情論の延長線上に置くことができる。<sup>13</sup>

ボッカチオの『デカメロン』にもまた古典期の言説に合致する友情譚が含まれている。十日目第八話では、ジシッポが自らの婚約者ソフロニアに恋した親友ティトのために内密に彼女を譲る。ジシッポにとって、代わりの見つかる妻とは異なり友はかけがえのない存在なのである。物語終盤には、落ちぶれたジシッポが、関与していない殺人事件の犯人として名乗りをあげ死刑に処せられようとするところをティトが自ら「自首」して助けようとし、その様子は皇帝を感動させるに至る。本挿話はリドゲイト (1370年頃～1450年頃) によっても翻案され、中英語で書かれた二人の商人の物語 *Fabula duorum mercatorum* となった。

こうした物語中の友情モチーフは、民話にまで遡る sworn brotherhood の要素も受け継いでいると考えられるが、キケロ以来の友情論に合致している。つまり物語の中では二人の男性間に友情が結ばれ、その関係は重んじられ、登場人物たちは全てを賭して互いを助け合おうとしている。その関係は基本的に物語終盤まで崩壊することがない。<sup>14</sup>友情は有徳の人物の間にしか結ばれないと論じられたが、物語の主人公たちも誓いを守り通す高潔さは備えている。また、登場人物たちが時に行う信義の宣誓は絶対的な行動規範となっていくのである。<sup>15</sup>

以上のように、古典期から中世期にかけて友情は賛美され、文学作品中でも重要な役割を果たしてきた。最初に友人になる際に注意すべき点や、友人のためならばどんなことも厭わず行うべきかといった問題が語られることはあるが、批判的な色彩はほとんど表れていないように見える。しかし、早くも聖書の時代から友人というものに対して否定的な側面が記述されていたことは注目されていない。

例を挙げれば、古典の時代の論説では実利を求めて友情関係を結ぶことは戒められたが、「箴言」の「貧乏な者は友にさえ嫌われるが／金持ちを愛する者は多い。」(14章20節)、「財産は友の数を増す。弱者は友から引き離される。」(19章4節)、「集会の書」13章21節「金持ちがよるめくと、友人が支えてくれる。身分の卑しい人が倒れると、／友人でさえ突き放す。」といったように、実際には資産が友人の有無を左右することが述べられている。同様に「集会の書」には「都合のよいときだけ友となり、／苦難のときには、離れてしまう者がいる。」(6章8節)、「食事のときだけ友であり、／苦難のときには、離れてしまう者がいる。」(6章10節)、「敵からは遠ざかれ。友達には気をつけよ。」(6章13節)といった記述も見える。聖書は、友情を賛美する一方で、否定的な見解や忠告も記していたのである。

中世の著述においても、友情を至上のものとする作品と平行して偽りの友人像も登場している。上に挙げたような聖書に見出される教訓的な文言は中世の著述にも含まれている。例えば貧しくなれば友人が離反す

るという教えは、チョーサー『カンタベリー物語』の「メリベウスの話」にみられ、ここでは友情が奨められる一方で、‘He [Salomon] seith also that “he that speket to his freend wordes of swetnesse and of plesaunce setteth a net biforn his feet to cacche hym.”’ (2368) と、友人を甘言で釣っておだてる者の存在が指摘される。「教区司祭の話」には ‘discord, thurgh which a man forsaketh his olde freend that he hath loved ful longe;’ (561) とあり、怒りから生ずるものである不和によって、人は古くからの友人を見捨てると記されている。また、Vernon 写本に含まれた預言者たちの格言集 *Proverbes of Diverse Profetes and of Poetes and of Other Seyntes* には、苦難の際に離れる友がいると説かれている。この格言集は、神への畏れ、善行、施しや召使の扱い、家族や隣人との接し方など多様な教訓がサムエル、セネカ、ヨブ、アウグスティヌスらの名を引き合いに出しながらラテン語の文句および仏語、英語韻文の対訳形式で綴られている。<sup>16</sup>セネカ「隠れていた憎悪はもしあなたがつまづいてしまえば明らかになる (*Odia que latuerunt panduntur si titubaueris.*)」の文言の下には、以下のような一節が付されている。

3if þou falle in aduersite,  
Pou schal fynde and wite, parde,  
Of whom þou wendest a frend haue had,  
Pen wole to þe be enemy sad. (261–64)<sup>17</sup>

「集会の書」にも教え諭されている通り、不運に陥った場合には友人であると思っていた者たちは重大な敵となるということが明言されている。こうした教訓の文句に現れる友人像に加え、この格言集にはより具体的な例も示されている。セネカ、「ある厄介な友人たち、不誠実な敵たち (*Amici quidem graues sunt, inimici leues.*)」と題された部分では、敵より悪い友もいると述べられている。



Such a frend þou miht haue sikerli  
 Pat þou were bettre haue an enemy;  
 Pat on of þi moneye hap hede ne cure,  
 Pat oþur naþ wiþ hym no mesure  
 To Borwe of þe ne of ofte comyng  
 Ne to soioune at his likyng.  
 Such frendschupe þe greue schal more parde  
 Þen þat oþeres enemizte. (113–120)<sup>18</sup>

これまでキケロらにより推奨されてきた友情は美徳であり、幸福な時には喜びを共有し、苦境に陥った際には素早く手を差し伸べ合うなど互いの益となるものだった。しかしこの一節に描かれている友人は節度もなく、苦痛を与える存在でしかない。抽象的概念の友情は賞讃されても、実際に出会う友人たちの中には敵を持った方がまだ良いと思えるほどの者たちがいるとこの一節は指摘している。友情が立派な美徳であり続けた一方で、現実には不誠実な、あるいは友人の苦境に背を向けるような「友人」が存在するという点も書かれるようになったのである。ギリシアの哲学者たちやキケロの議論においてはそもそも有徳の人の間にしか友情は結ばれ得なかったが、真の友もいれば偽りの友もいて、時には偽の友情に悩まされることもあるという、古典期の理想論とは対極的な友人の姿がここにはある。

友情の賛美と皮肉な視点との双方が読み取れる作品としては『薔薇物語』がある。本作品は13世紀にギョーム・ド・ロリスが前編を、ジャン・ド・マンが後編を執筆し、14世紀にチョーサーが部分訳を行った。ジャン・ド・マンの後編ではキケロを基に友情の定義が述べられ、この箇所は無論この美徳を賞讃している。チョーサーの部分訳においても同様に、友情が定義され称揚される。ジャン・ド・マンは、良き友たる者は〈運命〉の動きや相手の貧富に関わらず自らを不動のままに保ち、相手を率先して援助すべきであることを〈理性〉に語らせた。チョーサーも同じく〈理

性)を登場させ、友情によって人は過つことがなく、良い時も悪い時もその関係は保たれることを述べている。また、神の命に基づいたものとして友情を位置づけている。

しかし、抽象的な「友情」ではなく寓意擬人像の〈友〉が現れると、その姿は必ずしも高潔なものではない。ギョーム・ド・ロリスの前編およびチョーサーの前編では〈友〉は主人公に助言を与え、安心させ、喜びを共有する存在であるが、ジャン・ド・マンの後編に登場する〈友〉の描写は、前編とは異なる印象を与える。〈友〉は後編において2700行あまりにわたる語りを展開し、その内容は主人公への忠告から友を失った体験、贈り物の力、夫による妻や結婚の痛烈な非難まで多岐にわたる。しかし主人公への助言は前編の〈友〉のそれとは様相が異なり、〈友〉は他の寓意擬人像〈中傷〉、〈老婆〉、〈嫉妬〉をなだめすかして取り入り、これらの人物におもねり、おだてることを勧めている。番人は買収し、タマネギやニンニクを目に塗って泣き落とせとまで教えられるため、結果として主人公が一度はその方策を拒絶するほどである。〈友〉がひとえに主人公を助けようとこのような教えを授けているとしても、その姿はギリシア哲学者の時代以来褒め称えられた徳の高い友人像と比較すると異質なものである。こうした〈友〉の姿はチョーサーの部分訳にはない。

さらに、「友を試す」という主題が注目される。熟慮の上友人を選べという忠告は聖書やキケロに繰り返され、<sup>19</sup>アエルレッドも *De spirituali amicitia* の中でこの問題について具体的に詳述している。アエルレッドは ‘Quatuor quaedam probanda sunt in amico: fides, intentio, discretio, patientia.’<sup>20</sup> と述べ、友人は注意深く選んだ上でさらに誠実さ、友情を結ぶ意図、判断力と忍耐を試して初めて受け入れねばならないと主張した。また、非難や不正、高慢、秘密の暴露、陰口があった場合には友人といえども和解はあり得ないとし、「集会の書」に言及しつつ ‘Et de electione tractantes, iracundos, instabiles, suspiciosos atque uerbosos exclusimus;’<sup>21</sup> として避けた方が良いのはいかなる人間かを明白に指摘している。こうして友の選択基準を明確にした上で、真の友は貧困や敵

意の中で明らかになると主張されている。

*In necessitate enim, ut ait quidam, probatur amicus. Amici diuitis multi. Sed utrum uere amici sint, interueniens paupertas explorat. Omni tempore, ait Salomon, diligit qui amicus est, et frater in angustiis comprobatur. [...] Multa sunt alia quibus probatur fides amici, quamuis in sinistris maxime.*<sup>22</sup>

アエルレッドは聖書を根拠に、富が友情に影響すること、敵意の中最も良く友が試されることを語る。友情が試練に遭う主題は *Amis and Amiloun* や『デカメロン』十日目第八話にも見出される。しかし、これらの物語ではさまざまな苦難が乗り越えられ友情が保たれるのに対し、『薔薇物語』においてはすでに友である者たちが離反していく様子が語られる。〈友〉はかつてその財産ゆえに皆に愛され気前良く振る舞っていた。しかしその寛大さが災いして〈友〉は貧困に陥り、450人以上の友人を失ったという。そこで残ったのはただ一人の真の友であった。〈友〉の体験談は、聖書やアエルレッドが指摘したように、本当の友人は困難の中試されて初めてわかることを明確にする。

car Fortune tantost en place  
la bone amor a pleine face  
de mon bon ami me montra  
par Povreté, qui m'encontra,  
c'onques n'eüsse conneü,  
s'il n'eüst mon besoing veü.  
Mes quant le sot, il acorut  
et quan qu'il pot me securut  
et tout m'offri quan qu'il avoit  
por ce que mon besoing savoit.

« Amis, dist il, faiz vos savoir,  
 vez ci le cors, vez ci l'avoir  
 ou vos avez autant con gié.  
 Prenez en sanz prendre congié.  
 — Mes combien? — Se vos nou savez,  
 tout, se de tant mestier avez;  
 car amis ne prise une prune  
 contre ami les biens de Fortune.  
 Et mes biens naturels meïsmes,  
 puis que si nous entreveïsmes  
 que bien nos entreconneümes,  
 par quoi noz queurs conjointz eümes  
 (car ainceis nos entresprovames,  
 si que bons amis nous trovames,  
 car nus ne set sanz esprover  
 s'il peut leal ami trover),  
 vos gart je torjorz obligiez,<sup>23</sup>

(Le Roman de la rose, 8025–51)

こうして〈友〉が語るように、運命の流転と貧しさの中で一人の本当の友人だけがすぐに駆けつけ、惜しまず助力を申し出た。資産に恵まれ数百人の友人と交際していた時には、困難な時誰が支えてくれるかは明らかでなかったのである。〈友〉の援助に馳せ参じた友人は、見返りを求めずに自らの持つ全てを〈友〉のために差し出す。さらに、この語りにおいて、〈友〉とこの真の友人とがお互いに試し合っていたことも明らかにされ、試練の中においてのみ本当の友は明らかになるとこの友人は自ら述べている。

逆境にある時にそばに留まる友人こそ真の友であるという考え方は、16世紀の道徳寓意劇 *Everyman* にも表出している。本劇では主人公 *Everyman* が *Death* に召喚されるにあたり、さまざまな寓意擬人像たち

に同行を頼む。しかし冒頭に、彼らがあたかも五月の花のように姿を消していくと予告されている通り、彼らは Everyman の旅路を知るなり同行を断り、去っていく。

Death は、Everyman を召喚し ‘prove thy friends if thou can’ (142)<sup>24</sup> と声をかける。それに従い Everyman は全幅の信頼を寄せる Fellowship に話をもちかけ、即座に承諾を得る。Fellowship は Everyman の危機を知り、決して見捨てることはないと繰り返し約束するのである。さらに、口先だけで何もしない者を自ら批判してみせる。しかし、Fellowship は再三の約束にも関わらず Everyman の旅が危険なものであることを知るやいなや躊躇し、戻れぬ旅であると聞いた時点で同行を拒否する。

*Everyman.* Why, ye said if I had need

Ye would me never forsake, quick ne dead,

Though it were to hell, truly.

*Fellowship.* So I said, certainly,

But such pleasures be set aside, the sooth to say;

And also, if we took such a journey,

When should we come again?

*Everyman.* Nay, never again, till the day of doom.

*Fellowship.* In faith, then will not I come there! (254–62)

このように Everyman が「見捨てないと言ったではないか」と責めても、Fellowship は共に旅路に出ることはないと言断する。Fellowship は飲食や女性との交際をするなら見捨てはしないと一旦譲歩するが、結局は Everyman の再三の願いを退け、立ち去ってしまう。寓意擬人像の友人たちの中の〈友人〉である Fellowship が最初に Everyman を見捨てるという筋書きは、Conley の指摘するように災難に際して真の友がわかるという聖書などの教えを表す一方で、<sup>25</sup>友情を至高の美德として称揚したキケロの議論、friendship を何より優先させた *Amis and Amiloun* や『デ

カメロン』十日目第八話などの作品と大きく異なる。また、頼まれずとも進んで友人に助力を申し出るよう勧めた古典期の論説や、自発的に助け合った *Amis and Amiloun* などの主人公らとは異なり、*Everyman* は多くの友に助けを請い求めねばならなかった。*Fellowship* という名を冠した人物こそが偽の友であったという皮肉な描写は、古典以来綿々と讃えられてきた友情とは一線を画すイメージを残す。

以上のように、友情は確かに古典以来美德として賞讃され続け、その流れに沿った友情論や文学作品も多く生まれた。しかしその一方で、理想論とは対極にある友人像も聖書以来描かれていた。現実には真の友と偽りの友が存在し、偽りの友情は困窮の中で容易に崩壊してしまう。友情の真偽は試すまでわからず、時には偽りの友情に苦しめられることもあり、理想的な関係を結ぶのにふさわしくない者も、悪徳の下の関係を友情と誤解する者も存在する。こうしたことを踏まえて多くの戒めを含む格言的な文章が書かれてきた。中世後期の文学においては全てを超越する徳である友情と、偽りの友人像それぞれが個々の著述に描出されている。キケロ的な理想の概念としての友情は、*Amis and Amiloun*、*Guy of Warwick* や『デカメロン』等に表出し、試練に際しても崩壊しない登場人物たちの密接な関係が重視され重要な役割を果たす。この友情の要素は *King Horn*、「騎士の物語」、『トロイルスとクリセイデ』にも認められる。さらにアエルレッドの *De spirituali amicitia* や『薔薇物語』における友情の定義にも理想的友情論が受容されている。一方で友人や友情の否定的側面を含む格言的な言説は、友情を中心に据えた物語よりむしろ論考としての著作や格言集、寓意を前面に出した作品に引き継がれた。*De spirituali amicitia* は友情の賛美のみならず聖書を論拠とした訓戒を多く含み、Vernon 写本の格言集でも同様に聖書に由来する金言が織り込まれた。『カンタベリー物語』でも「メリベウスの話」、「教区司祭の話」のように友情を主題とするのではなく論じる箇所では、友人を陥れたり見捨てたりする者の存在が指摘される。『薔薇物語』や *Everyman* における寓意擬人像においては本当の友ではない〈友〉の姿も描かれ、

二面的で皮肉な視点が読み取れる。こうして、古典以来続く美德としての友情の系譜を受け継ぐ作品が存在する一方で、現実の友や登場人物としての〈友〉の二面性が表出し、これら二つの伝統が個々の作品の性質を特徴づけているのである。

註

- \* 本稿の執筆にあたりご指導賜った慶應義塾大学 松田隆美教授に心より感謝申し上げたい。
- 1 キリスト教以前の友情論については、Reginald Hyatte, *The Arts of Friendship: The Idealization of Friendship in Medieval and Early Renaissance Literature*, Brill's Studies in Intellectual History, 50 (Leiden: E. J. Brill, 1994)、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』加来彰俊訳 全3巻(岩波書店、1984)などを参照。
  - 2 キケロー『友情について』中務哲郎訳(岩波書店、2004)、p. 22.
  - 3 旧約聖書第二正典、カトリック教会の用いる羅訳聖書ウルガタに採録。
  - 4 以下本稿における聖書の引用は新共同訳を使用した。全てウルガタにも対応する章句が存在する。
  - 5 F. J. E. Raby, 'Amor and Amicitia: A Mediaeval Poem', *Speculum*, 40 (1965), 599–610.
  - 6 Aelredi Rievallensis, *Opera omnia*, ed. by A. Hoste, O.S.B. and C. H. Talbot, Corpus Christianorum, 4 vols (Turnholti: Typographi Brepols Editores Pontificii, 1971–2005), I: *Opera ascetica* (1971), p. 295. ここで、ある友情は肉の、あるものは世俗の、あるものは精神の友情と言われる。そして悪徳の合意が、言わば肉の(友情)を作る;世俗の(友情)は利得の期待を高める。精神の(友情)は善人の中で生活の習慣と熱意の類似が結び合わせる。(以下和訳は筆者自身による)。
  - 7 *ibid.*, p. 315. 従って、この全てのことから精神の友情の明白な、真の目標が明らかである: 即ち何も友には拒まれるべきでなく、友のために実行せらるべきでないことは全くなく、それは神の権威が神聖化した、この貴重な身体を友のために捧げられるべきことより小さなことである。精神の命が肉体のそれよりずっと優れるゆえに、このことが絶対に友に拒まれるべきことと我々は考えよう、精神の死を引き起こすものだ。それは神を精神から、生命から精神を分離させる罪以外の何物でもない。

- 8 『友情について』、p. 41.
- 9 中世文学と古典の友情の関連性については、Victoria Kirkham, ‘The Classic Bond of Friendship in Boccaccio’s *Tito and Gisippo* (*Decameron* 10.8)’, in *The Classics in the Middle Ages*, ed. by Aldo S. Bernardo and Saul Levin (Binghamton, New York: Center for Medieval & Early Renaissance Studies, 1990), pp. 223–35; Robert Stretter, ‘Rewriting Perfect Friendship in Chaucer’s *Knight’s Tale* and Lydgate’s *Fabula Duorum Mercatorum*’, *Chaucer Review*, 37 (2003), 234–52; Robert Stretter, ‘Cicero on Stage: *Damon and Pithias* and the Fate of Classical Friendship in English Renaissance Drama’, *Texas Studies in Literature and Language*, 47 (2005), 345–65; Rosemary Woolf, ‘A Middle English Classic’, *Essays in Criticism*, 11 (1961), 210–14 など。
- 10 David Konstan, ‘Afterword: *Ami, Amile*, and the Classical Tradition of Friendship’, in *Ami and Amile: A Medieval Tale of Friendship*, trans. by Samuel N. Rosenberg and Samuel Danon (Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 1996), pp. 143–55; Huguet Legros, ‘Le vocabulaire de l’amitié, son évolution sémantique au cours du XII<sup>e</sup> siècle’, *Cahiers de Civilisation Médiévale* (Xe–XII<sup>e</sup> Siècles), 23:2 (1980), 131–39.
- 11 『友情について』、p. 58.
- 12 本稿のチオーサーの引用は全て Larry D. Benson, ed., *The Riverside Chaucer*, 3rd edn (Oxford: Oxford University Press, 1988) による。
- 13 『トロイルスとクリセイデ』を古典期の友情論と関連づけるかどうかについては諸説ある。Robert G. Cook, ‘Chaucer’s Pandarus and the Medieval Ideal of Friendship’, *JEGP*, 69 (1970), 407–24; John Hill, ‘Aristocratic Friendship in *Troilus and Criseyde*: Pandarus, Courtly Love and Ciceronian Brotherhood in Troy’, in *New Readings of Chaucer’s Poetry*, ed. by Robert G. Benson and Susan J. Ridyard, introd. by Derek Brewer (Cambridge: Brewer, 2003), pp. 165–82 など を参照。
- 14 中英語ロマンス *Athelston* では誓いを交わした四人の関係が一人の嫉妬により崩壊するが、こうした例は少ない。
- 15 Leach は、登場人物たちが全力で相互に助け合うモチーフは11世紀サンスクリットの民話まで遡るが、誓いの場面はこういった民話から由来したものではないと論じている。MacEdward Leach, ed., *Amis and Amiloun*, EETS, OS, 203 (London: Oxford University Press, 1935; repr. 1960) 序論を参照。



- 16 セネからの名が引かれているが、旧約聖書（ウルガタ）の「伝道の書」をソースとする。Takami Matsuda, 'Death and Transience in the Vernon Refrain Series', *English Studies*, 70 (1989), 193–205 参照。知恵文学と格言集の伝統については Barry Taylor, 'Medieval Proverb Collections: The West European Tradition', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 55 (1992), 19–35 を見よ。
- 17 C. Horstmann and F. J. Furnivall, eds, *The Minor Poems of the Vernon MS*, 2 vols, EETS, OS, 98, 117 (London: Kegan Paul Trench, 1892, 1901; repr. Millwood, NY: Kraus Reprint, 1973), p. 539.
- 18 *ibid.*, p. 529.
- 19 「集会の書」6章7節「友をつくるときは、試してからにせよ。すぐに彼を信頼してはいけない。」
- 20 *Opera ascetica*, p. 329. ある4つが友において吟味せらるべきだ: 信義、意図、思慮、忍耐である。
- 21 *ibid.*, p. 328. そして（友の）選択について我々は短気な者たち、不安定な者たち、疑心ある者たちまた多弁な者たちを避けたと論じている。
- 22 *ibid.*, pp. 329–30. 確かに苦境において、とある者は言った、友が試される。富者の友は多い。だが真に友人たちであるかどうかは貧困が試すことで現れてくる。常に、とソロモンは言った、友である者は愛し、兄弟は貧困のうちに証される。（中略）友の信義が試される別のことは多くあるが、主として敵意に満ちた時である。
- 23 Guillaume de Lorris and Jean de Meun, *Le Roman de la rose*, ed. by Félix Lecoy, 3 vols (Paris: Librairie Honoré Champion, 1965–70) より引用。つまり〈運命〉はわたしと遭遇した〈貧困〉を通じて、わが良き友の美しい愛情を、真っ正面からただちに見せたのです。そのような友の存在は、もし彼がわたしの困窮を見なければ、決してわたしの知るところとはならなかったでしょう。けれども彼はわたしの窮状を知ると、たちまち駆けつけて来てはできるかぎりの助力を惜しまず、持てるものすべてをわたしに与えました。わたしが不如意であるのがよくわかっていたからです。「友よ」と彼は言いました。「教えておこう。ここに僕の体があり、金がある。これらは僕のものであると同時に君のものだ。いちいち断らずに持って行ってほしい」。「でも、いったいどれぐらい持って行っていいんだい」。「わからなければ教えよう。必要とあればすべてだ。友人にとって、その友と比べれば、〈運命〉のくれた財産などプラム一個にも値しない。それに僕には生まれたときから与えられたものがある。それらのものを、われわれが出会い、知り合い、そうして心が結ばれたときから——なぜならかつてわれわれ

は互いに試し合って良き友であることを確かめ合った、それというのも試すことなしに誠実な友であるかどうかを知ることはできないからだが——、君のために大切にしてきた。

訳文はギョーム・ド・ロリス／ジャン・ド・マン『薔薇物語』篠田勝英訳（筑摩書房、2007）、上、pp. 337–38による。

- 24 引用は A. C. Cawley, ed. and introd., *Everyman and Medieval Miracle Plays* (London: J. M. Dent, 1956; repr. 1970) による。
- 25 John Conley, 'The Doctrine of Friendship in *Everyman*', *Speculum*, 44 (1969), 374–82.